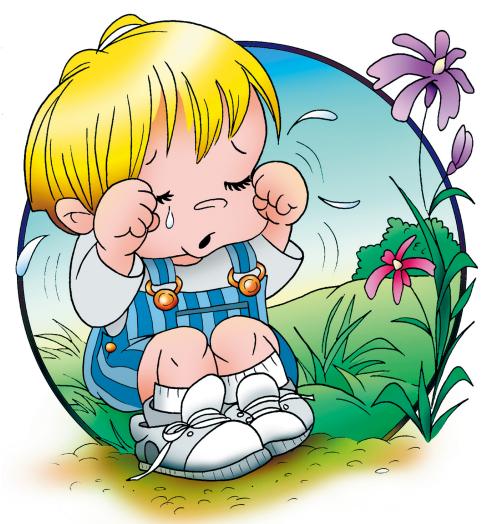


トリスタンの 泣き声が、庭中にも 家中にも ひびいて きました。 「一体 どうしたんだい、トリスタン?」 ひざを すりむいた 孫の トリスタンを 見つけると、ジェイクおじいちゃんが たずねました。

「おじいちゃん、いたいよ~。」と、トリスタン。







「ああ。おまえみたいに、思わぬ トラブルに はまって 教訓を 学んだ、 ドゥルーディっていう トンボの お話だよ。」

「おじいちゃん、その お話を して。」と、トリスタン。

それで、ジェイクおじいちゃんは お話を し始めました。 「ドゥルーディが、友だちの リンカーンと ファイアリーに 会うと・・・」

「信じられない ことが 起こったのよ。」 ドゥルーディが、日なた ぼっこを している 友だちの 所へ 来ると、ハァハァ 息を 切らせ



「そうじゃ ないの。ただ、こわい 曽に あったのよ。



「みんなと 遊んでてね。できるだけ 高く 舞い上がって、それから、 地に 向かって 急降下するの。そして、だれが 最初に、水面で 輪を かいている アメンボを、水に ぬれずに つかまえられるかって いう 競争を していたの。



実を 言うと、わたしは あまり 上手じゃ なくて。 高く 舞い上がる ことは できるん だけど、みんなみたいに 急降下 できなくて。 ちっとも アメンボが つかまらなかったのよ。 それで いらいらして、わたしも ^{cc) ま} 仲間の トンボたちみたいに 上手に できる ところを 見せて あげるわって ^{みず} 思ったの。水に はまるのを こわがってるなんて 思われたく なくてね。だから、 高く ま 舞い上がって 急降下した 時、スピードばかりに 気を取られていて、 ^{ふちゅうい} 不注意だったの。速過ぎて、 アメンボを つかまえるどころか、 曲がりそこねて、水に つっこんで しまったのよ。1 と、ドゥルーディ。



「猛スピードで つっこんだ せいで が 回って、水から 飛び出ようにも で出られなかったの。」

「そりゃあ、大変だったわね!」 と、ファイアリー。

「きっと、こわかっただろうね。 ぼくだったら きっと、こわかったと 思うよ。」と、リンカーンも 言いました。

「最初は こわく なかったんだけど、 が水から 飛べ出せなく なって、 こわく なっちゃったの。 羽が びしょびしょで 童くて、全然 持ち上げられなくて、身動きが 取れなく なっちゃったのよ。」

「うわぁ、大変だ!」と、 リンカーン。

> 「それで、どうしたの?」 と、ファイアリー。

「友だちが わたしを 引っ張り 上げようと したんだけど、 童すぎて、それも 無理だったの。」



「このまま ずっと 水に はまった ままで、もしかしたら おぼれちゃうんじゃないかって、心配だったわ。友だちが 助けを よびに 行ったんだけど、わたしは一人きりで、すごく 心細かった。」

「それで、どうしたんだい?」と、リンカーン。

「こまった 時には どうしたら いいか、いつも お母さんが 教えて くれていたことを 思い出したの。祈ったのよ。わたしを 助ける 方法を 友だちが 見つけてくれるか、だれかを 送って、わたしを 助けて くれますようにって、神様に祈ったの。負けん気に なって こんな 不注意な ことを するなんて、もうしませんって、神様に 約束したのよ。」





「『シド! シド! トンボが 水に はまってるわ。出して あげないと。』って、 ϕ 女の子が さけんだの。

お兄ちゃんも ふり向いて、わたしに 気が 付いたのよ。それで、わたしを そっと 水から 引き上げて くれたの。

『かわいそうに。シーラが トンボに 気が 付いて 良かったよ。もう ちょっとで おぼれる とこだったからね。ここの 葉っぱに 乗っけて、羽を かわかせるように してあげよう。そうしたら、また 飛べるように なるよ。』」



「こまってた 時に 子どもたちが 通りがかって、良かったわ。」と、 ファイアリーが 言いました。

「君が無事で、本当に良かったよ。」 リンカーンも、ほっとして言いました。

「本当にね。これからは、もっと 気を 付けるわ。」と、ドゥルーディ。



「何か して 遊ばない?」 ファイアリーが たずねました。

「ええ。」と、ドゥルーディ。

「できるだけ、気を 付けながらね。」と、リンカーン。

「それから、競争心を 出し過ぎないようにね。」と、 ファイアリーも 言いました。

A A A

「ぼく、ドゥルーディみたいな 大変な ことに ならなくて、 食かったよ。」と、トリスタン。

「全くね。だが、不注意だと事故が起こりやすいっていうのは、覚えておかないとな。だれかと遊んでいて、勝ちたい、勝ちたい、と思っていると、ドゥルーディみたいに、不注意になりやすいものだ。」

「外に出て遊ぶ前に、ちゃんとくつひもを結ばないとね。」と、トリスタン。

「それからな、もう¹つ、覚えておくべき ことが ある。 ドゥルーディの お話から 学んだ ことを、覚えているかい?」

トリスタンは ちょっと 考えて 言いました。「祈る こと?」

「その 通りじゃ! 神様が おまえを ケガから 守れるようにな。」

トリスタンと おじいちゃんは、いっしょに 祈りました。 それから、トリスタンは 友だちと 遊びに もどって 行きました。

そばの 葉っぱでは、トリスタンを 見ていた 3 匹の 虫たちが、たがいに 顔を 見合わせて ほほえみました。

文:カチューシャ・ジュスティ 絵:アグネス・リメア 彩色:ダグ・カルダー デザイン:ロイ・エバンス 掲載:マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2007 年、オーロラ・プロダクションズ AG、スイス、不許複製 "Grandpa Jake's Storybook: Insects Galore: Drudy's Day" --Japanese 関連の読み物はこちら ⇒ 安全と事故、ジェイクおじいちゃんのお話シリーズ、 ゆかいな虫たち、子供のための物語、祈り

